

雄波郷

歴史の教科書や観光パンフレットには載っていない、もっと深くにかほ市を知りたい…そんな皆さんにおすすめするのが、にかほ市郷土史研究会とにかほ市教育委員会が共同で発行している『雄波郷』です。

仁賀保・金浦・象潟のそれぞれの歴史や文化など、さまざまなテーマについて専門家や会員が日頃の研究成果をまとめあげた、にかほ市をさらに深掘りした1冊。俗に言うコアな部分がふんだんに掲載されています。

平成19年に創刊号を発刊以来年に1回のペースで出版し、現在は15号まで発行されています。掲載内容としては、斎藤憲三や

白瀬轟、齋藤由理男など郷土の先人はもちろん、松尾芭蕉や小林一茶などの歴史人、にかほ市の郷村のあしどり、そして自然、生物など多岐にわたっています。そして繰り返しになりますが、既に認知され、知っていて当たり前の史実ではなく、それぞれの寄稿者によりさまざまな角度から検証されています。ぜひ、手に取っていただき秋の深まりとともに温故知新に浸ってみませんか。

今号では『雄波郷』を紹介するとともに、にかほ市郷土史研究会・会長の池田史郎さんにお話を伺いました。

知る楽しめと共有する喜び

にかほ市郷土史研究会 会長 池田史郎

旧仁賀保町の広報担当だった頃、「昔を訪ねて」というコーナーがありました。もう40年以上も前になりますので覚えていない方も少ないかと思いますが、町内に建っている石碑の歴史と背景を紹介するシリーズでした。当時は郷土史に馴染みが薄かったため、地元の郷土史研究家の方に協力していただき、その節は大変お世話になりました。その後、仁賀保勤労青少年ホームでは『小川家文書』の解説に携わりました。古文書の「こ」の字も知りませんでした。振り返ると在職中は曲がりなりにも郷土史に触れている時間が多かったかもしれません。

本格的に始めたのは退職後です。退職した翌日の4月1日、気力が抜けたと

いうかなんというか、何もせず夕方になっていました。「このままではおかしくなる」と思い、2つのことを始めました。ひとつはウォーキングで、もちろん今も続けています。そして、もうひとつが古文書です。

私は郷土史に関して特に専門分野があるわけではありません。古文書の解説にあたる傍ら、日頃から何気なく街中を歩き話を聞く、それだけで新しい発見につながります。発見は知的興奮になり、そこからさらに深掘りしていくのは楽しくて本当にワクワクします。

昨年11月、矢島郷土史研究会の皆さんがにかほ市を訪れた際

『雄波郷』は、旬の話題を巻頭カラーで紹介しています。また、巻末では「にかほ市の指定文化財一覧」を掲載しています。



『雄波郷』

「雄波郷」は、平安時代ころ、象潟、金浦、仁賀保の地域を「飽海郡雄波郷」と呼んでいたと、平安中期に編纂された漢和辞典であり、百科辞典でもある『和名類聚抄』にあり、それに因んだものです。「雄波」は、日本海に面したこの地域に波がおし寄せることから郷名にされたと伝えられています。

平成19年に発刊された創刊号。唯一のA5版で、以降はB5版に統一され、第5号から表紙がカラーとなっている。各号とも平均150ページを超える大ボリュームです。



にも新しい発見がありました。旧矢島藩だった小出地区を訪れるということ、案内を頼まれ、自分なりに勉強しましたが、その過程である人物のお墓が寺田にあることに辿り着きました。詳細は省きますが、このことには矢島郷土史研究会の皆さんも大変驚き有意義な探訪になったと喜んでくれました。いづれ『雄波郷』で紹介できればと考えていますが、70年以上暮らしているふるさとにも、まだまだ知らないことはあるものです。

現在、15号まで発行されている『雄波郷』ですが、私は2号から寄稿しています。内容は多

岐にわたりますが、寄稿者によつては郷土の先人や歴史をシリーズ化していたり、動植物や自然、文化など着眼点はさまざまです。そして、毎号にかほ市を題材として研究していただいている大学の先生方の特別寄稿もあり読み応えは抜群です。今も続くコロナ禍により、私たちにかほ市郷土史研究会も活動の自粛を余儀なくされています。会員の高齢化もあり年々寄稿者が減っていますが、それでも私たちが知ったことを後世に遺していきたいと思っています。知る楽しみが詰まった『雄波郷』をとおして、皆さんと喜びを共有できれば幸いです。



『雄波郷』は、象潟郷土資料館で1冊1,000円（税込み）で販売しているほか、市内図書館で貸し出ししています。掲載内容は右記QRから確認ください。号によっては在庫に限りがあるものもありますので、予めご了承ください。